

Newsletter

2007 September No. 1



Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

心に関する世界水準の教育研究拠点の開設によせて

慶應義塾長 安西祐一郎



このたび「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」が2007年度グローバルCOEプログラムの人文科学分野に採択され、新たに教育研究拠点が開設されるにあたり、渡辺茂リーダーをはじめとする事業推進担当者、事務局の方々、当プログラムに関わるすべての関係者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

21世紀COEプログラムからグローバルCOEプログラムへの重要な変化のひとつは、「研究教育拠点」から「教育研究拠点」への名称の転換です。つまり、当拠点は、激動する世界の中で、輝かしい未来社会を創造していく次世代のリーダーを育むための場となることを意味するのです。いま、私たちには、知的価値の創造を通し、グローバルな視点から日本と国際社会を発展へと導く未来への先導者を育成することが何より求められています。この拠点形成には、そのような感動教育の実践にむけた私たちの願いがこめられているのです。

人間における「論理と感性」という判断の二重性は古くから人間理解にあたっての根源的な問題であり、これを解明するために、これまでさまざまな分野の知見が集められてきました。当拠点では、この人間の本質に関わるテーマを探求するにあたり、ヒト脳の活動が眼前に可視化できるfMRIを使用するなど、最先端の技術を活用して認知科学の新たな領域を切り開いて行きます。

また、海外の国際拠点との連携も強化され、多くの人的交流と情報共有が図られます。このように既存の学問領域にとらわれない分野融合的で国際的な研究手法が、「論理と感性」の二重性の解明へ向けて、きわめて大きな役割を果たすことと思われます。

当拠点はアジアにおける初の心に関する世界的水準の教育研究拠点です。国際的で幅広い視点を持った多数の若手研究者が育成されることを心から期待いたします。

「論理と感性」のメカニズムの解明に、時代を先取りして総合的な視点から挑戦する当教育研究拠点は慶應義塾の誇りです。人類の未来の発展に大きく貢献する当拠点へ、今後ともご指導、ご支援を賜りますよう心からお願い申し上げます。

Contents

心に関する世界水準の教育研究拠点の開設によせて 安西祐一郎	1
拠点ブランド・デザインの紹介	2
教育研究プログラムの紹介	4
拠点運用委員会の紹介	6
活動報告	7
特別研究教員紹介	8

いまを自在の翹なからずや¹⁾

グローバル COE は無事発足した。まずは前身の 21 世紀 COE を成功のうちに完了された 21 世紀 COE 拠点リーダーの西村さんの 5 年間の労をねぎらいたい。けだし、21 世紀 COE の成果なしにはグローバル COE の発足は難しかったと思う。21 世紀 COE の申請の時はゼロからの手作りで皆多に消耗したが、今回は 21 世紀 COE の事務局が全面的に協力してくれたので、僕はもっぱら申請書の本文作成に専念することができた。有り難いことである。

目的

本拠点は「論理と感性」の先端的教育研究を、海外の有力な教育研究機関と連携して行うものである。ヒトの判断には論理的アルゴリズムによる合理的判断と感性や情動による直感的判断がある。両者の関係は認識論の古くからの課題であるが、近年の認知科学、神経科学の発展は、判断における論理と感性がひとつの系として、ある時は相互補完的に、ある時は対立的に働いていることを示しつつある。論理や感性のプロセスは必ずしも意識化できる過程ではなく、脳科学的アプローチが必須であり、言語や文化による制約も大きい。本グローバル COE 拠点では、判断における論理と感性の統合を、最も基礎にある生物学的レベルから文化レベルまで、総合的に理解しようとする。

具体的には、1) 論理判断は系統発生的にどのように発生したのか、2) 脳内機構としては論理と感性はどのような系を構成しているか、3) その遺伝と発達的变化はなにか、4) 論理・情報学的には論理と感性の相互作用はどのように表現できるか、5) どのような文化的制約があるのか、という5点を明らかにする。論理と感性の解明は分野融合的な研究にならざるをえない。この研究に参加することを通じて実験科学的技法をもった人文研究者、人文科学的な知性を身につけた実験研究者を育成し、国際社会に送り出すことが本拠点の教育的目標である。心の問題は現代社会におけるもっとも緊急に解決しなければならない課題のひとつであり、本拠点はそのような問題の中でも特に重要な論理と感性の協調と対立の解明に対応できる深い知識、幅広い視野、国際レベルの先端的技术を併せ持った研究者を育成するものである。

教育研究体制

論理と感性の教育研究の中心に以下の5班からなる「教育研究プログラム」を設置し、国内、海外の連携拠点と密接な共同教育研究を行う。

1) 脳と進化班：チームリーダー 渡辺 茂

2) 遺伝と発達班：チームリーダー 山本淳一

3) 言語と認知班：チームリーダー タンクレディ・クリストファー

4) 哲学・文化人類学班：チームリーダー 宮坂敬三、飯田 隆

5) 論理・情報班：チームリーダー 岡田光弘

これらの教育研究の実施を支えるのが「研究施設」(脳研究施設、動物実験施設など)である。21 世紀 COE では、脳研究のために脳波計、光トポグラフィ(NIRS)、経頭蓋磁気刺激装置(TMS)を導入したが、本拠点のテーマである感性系の研究には皮質下の機能測定が必須であり、現在最強の脳機能画像法である3テスラ fMRI を導入する。

グローバル COE の特徴のひとつは若手研究者の育成にある。本拠点では「研究成果発信支援・評価プログラム」を設置し、若手研究者の国外での研究発表の効果的成果発信を支援する。アカデミックライティングの講座、個別論文作成の指導から、海外の第一線で活動するための戦略的指導まで行う。

グローバル COE のもうひとつの特徴は海外研究拠点との連携である。本拠点の教育研究に効果的に連携できる先端的教育研究機関として、現在ケンブリッジ大学、ウイーン大学、ビーレフェルト大学、エコール・ノルマル・シュペリール、パリ大学の5つの機関と提携関係を締結しており、そこからは5名の研究者が事業推進担当者として本拠点に参加している。これらの研究機関とは21 世紀 COE の活動を通じてすでに共同研究の実績がある。海外連携拠点と協力して若手研究者が共同研究やセミナーを行う「国際教育研究プログラム」を実施する。さらに、「国内連携拠点」として理化学研究所・脳科学総合研究センターの「象徴概念発達研究」チームから2名の研究者が事業推進担当者として参加している。

運営体制

運営は拠点リーダーを中心に、社会学研究科委員長、文学研究科委員長からなる幹事会、その下の「研究施設」、「研究成果発信支援・評価プログラム」、「国際教育研究プログラム」、「広報委員会」、「倫理委員会」、の各責任者からなる拠点運営委員会で行い、各責任者は随時当該部門の委員会を開催する。なお、これとは別に海外の委員を含めた「外部評価委員会」を設ける。

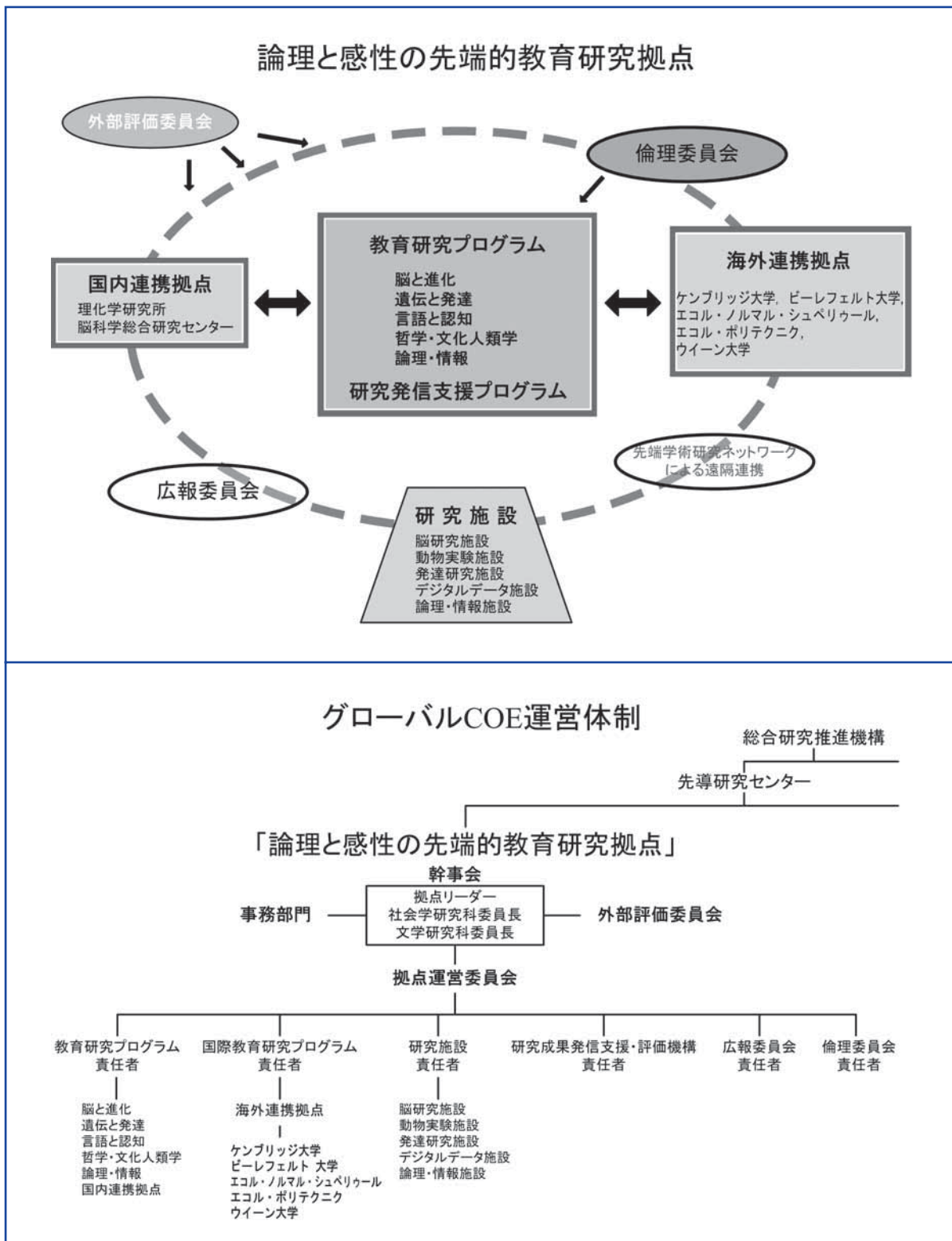
21 世紀 COE では NIRS や TMS を装備したが、今回は MRI を装備する。なにぶん高額な機器であり、これが人文科学の拠点か？と疑問視する声もあるようだが、心ないことである。最新の脳科学の装置を備えた人文系の拠点こそが、新時代の文理融合的な教育研究拠点の姿なのである。その意味で、本拠点は人文科学における新しい時代の先端的教育研究拠点の象徴的存在といっていいたい。

教育拠点にこのような最新設備が必要なのかという意見もある

ようだ。本拠点は学部教育のためのものではない。大学院で最先端の研究をする若手研究者を育成するためには最先端の研究設備での教育が必要なはいうまでもない。fMRIの原理であるBOLD効果の発見に日本人が決定的な役割を果たしているにもかかわらず、脳機能画像による心的機能研究の初期段階で我が国は決定的に遅れをとった。心理学をはじめとして人文、社会科学の研究者がその重要性に気がつかなかったこと、あるいは気がついていても疎外されていたことがその要因のひとつである。しかし、遅れた分、最先端の装備で研究を始めることができる。「MRI

による機能画像は脳の世紀を迎える人類に与えられた最大の贈り物」(中田, 1999)といわれる。本拠点に集う研究者諸君、機械はここにある、さあ存分に翅をひろげ給え。

1) 出典「かたちの子春の子血の子ほの子いまを自在の翅なからずや」(与謝野晶子)



教育研究プログラムの紹介

脳と進化班

チームリーダー 渡辺 茂



この班は2つの教育研究目的を持つ。論理と感性の脳内機構の解明とその系統発生的基盤の解明である。従って、5つの班の中ではもっとも実験的な色彩の強い班である。ヒトの脳画像研究は老雄小嶋祥三を中心に、ロンドン大学で画像研究の腕を磨いた梅田聡、今回のMRI導入の実質的な推進

者であった辻井岳雄が班員であり、BOLD信号の発見者である小川誠二のもとで基礎技術から学習した山本絵里子も参加する。脳機能の測定には、NIRS、EEGが以前から装備されており、脳に操作を加える方法としてはTMSがある。これらの長所をそれぞれ活かして、有機的に研究を展開したい。また、脳科学の教育についても基礎から技術まで教育プログラムを開設したい。

系統発生的研究では、情動が論理に優先する例として衝動的選択を分析する。そのため、選択行動のはば広い研究を展開して

いる坂上貴之を班員として擁し、石井拓も研究に参加する。また、拙老自らも率いるゼミの総力を挙げて、衝動的選択の比較研究とその脳内機構を解明する。系統発生的研究のもう一つの課題は動物におけるアルゴリズムに基づく判断の研究である。そのためには、動物にみずからの判断過程を弁別刺激とする行動を形成させる必要がある。これまた、拙老も自ら実験室に出で立ち、山に枯れ木を添える所存である。カラス脳地図作製で世界的に知られるようになった伊澤栄一の参加も心強い。論理や感性の研究には、自己認知、社会認知の研究も不可欠である。21世紀COEでの研究を発展させ、論理と感性を総合的に研究していきたい。

この班の特徴は、他の班の研究との連携を重視する、ということであり、美的判断、倫理判断、論理判断などの脳画像研究は是非展開したい。また、学外の研究者に対しても、本拠点の目的遂行に資するものには、共同研究として積極的に設備の利用を認めていきたい。

遺伝と発達班

チームリーダー 山本 淳一



論理と感性の「遺伝」「発達」「発達支援」

乳幼児から児童、成人期にわたって、以下のことを明らかにする研究を進める。ヒトの「論理」と「感性」は、それぞれどのように発達するのか、「論理」と「感性」の相互規定的な関係はどのようなもので、それが「こころ」

を形成する上でどのような働きをするのか、「論理」と「感性」の発達を規定する遺伝要因と環境要因はどのようなものか、個人の中の「論理」と「感性」の乖離は、発達の中でどのような問題をもたらすか、さまざまな発達障害を「論理」と「感性」という観点から包括的に見ることはできないか、「論理」と「感性」の固定性と可塑性はいかなるものか、などのテーマを探求していく。

そのために、「論理」(認知能力など)、「感性」(社会性など)の発達が、養育環境(家庭、園、社会)によってどのように規定されているかを、双生児を対象にし、遺伝の影響を統制した上で明らかにする。さらにさまざまな発達段階での双生児コフォート研究

を展開し、fMRIによる脳機能データとDNA情報をむすびつけ、遺伝子 脳機能 行動(論理・感性) 社会的・教育的環境の関連をもったデータベースの構築をめざす(安藤寿康、藤澤啓子担当)。

「論理」と「感性」は相互に影響を及ぼしあい、個体の中で全体として有機的にまとまったシステムとして発達すると考えられるが、それらが乖離して発達する場合がある。その場合、どのような心的機能の問題が起こるか、またどのように再統合が起こるかを明らかにする。そのような基礎研究によって得られたデータを発達臨床への応用へと展開する。発達障害を含めた様々な発達上の困難に関して、「論理」と「感性」が、環境との相互作用の中で安定し、バランスのよい発達を促すための「発達支援」方法を明らかにする(山本淳一、大森貴秀担当)。さらに、適切な「発達支援」によって、行動と脳機能にどのような変容が得られるかを明らかにする。

また、発達障害に限らず、家庭から園へ、園から学校へ、の移行過程をスムーズに進めるための子育て支援、就学前教育への提言を取りまとめていく。発達は、全てのチームに共通のテーマになりうるので、他のチームとの共同研究を積極的にすすめていきたい。

言語と認知班

チームリーダー クリストファー・タンクレディ



私たちのチームは、言語の構造、獲得、教育、処理過程を、その独立性と非言語的情報処理との相互作用の双方から、明らかにする。そうすることで、私たちは、次の疑問に対して答えることをねらいにする。人の言語の特性は何か? それらはどのように獲得されるか? それらは言語使用者の心の中

にいつ現れるか? それらは、脳の中の言語、非言語能力とどう関係するか?

私たちは、これらの問題に、いくつかの観点から光を当てる。第1言語、第2言語獲得を調べることで、言語発達の段階を明らかにしたい。言語、非言語情報処理のリソースの配分を調べることで、処理される情報の質が、いかに処理の効率に影響を与えるかを明らかにしたい。日本語児が、擬態語(オノマトツペ)を獲得する過程を調べることで、言語における象徴主義の神経機構についての知見を深めたい。最後に、リファレンスの形式的特性と多元性を探求することで、言語が意味を持つ根本的な道筋を明らかにしたい。私たちのチームの中心メンバーは、今井むつみ、伊東裕司、大津由紀雄、クリストファー・タンクレディである。



文化人類学チームは、人類の論理 / 感性が種としての共通基盤をもちつつも文化的要因によって多様なかたちで方向付けられている点に関わる研究を担当します。その際、人とはなにかについての文化的世界観が交錯的に作用している点、今日の文化混成状況が新たな要因として効いてきている点、

科学的研究も広義の世界観をもつため 19 世紀以来の科学パラダイムの変化に関連させながら今日の心 = 脳研究が提示する新たな世界観を生物文化的枠組に照らして人類学的にとらえうる点、を総合的に検討していきます。まず、文化人類学系の分野(心理人類学・認知人類学・社会人類学・認知考古人類学・科学技術人類学、医療人類学)の最新研究を精査して研究枠組みを作成しますが、その際、先端医療との関わりで研究調査する最新の医療人類学が理論的可能性と具体的研究の多様なありかたを提供しているため、重点的なよりどころとし、この点で世界的研究拠点となっているマッギル大学のアラン・ヤング教授(社会学研究科招聘教授として来日中、7月29日にシンポジウム開催)、ローレンス J. カーマイヤー教

授らのグループと研究提携を結びながら共同研究を手がけていく予定です。

当文化人類学チームの事業推進担当者の医療人類学者・北中淳子(文学部人間科学)は若手研究者として、同グループの同上研究者のほか、マーガレット・ロック教授と関わりが深く、最新の医療人類学方法に基づいて、普遍的疾患とされる「うつ病」が、文化や時代によって大きく変化する事実注目した調査研究を担当、更に、論理レベルでの介入によって感情の病とされるうつ病のコントロールを試みる「認知療法」の有効性について、比較文化的視点による調査分析も構想中です。この点は、当チームの全般枠組みのなかで、伝統的日本文化ないしその再創造志向にかかわる既存の療法や代替医療、さらには文化混成化の問題とからませることによって、さらに展開可能となるでしょう。

理論の枠組みの方向は上記のようにきまっていますが、具体的にとりあげる研究は他にも構想中です。マッギル大学との提携中心ですが、サブテーマごとに、塾内・国内・国外の研究者との協力を予算の範囲内で組んでいくことができればと思います。数年後には、同大との交換等を通じ、博士課程で国際的に活躍する人材養成の仕組みの一端を整えられればとも希望しています。



哲学・文化人類学グループのうちの三人、すなわち、遠山公一、樽井正義、飯田隆に関して、その教育研究プログラムを紹介しよう。

遠山の分野は美術史であるが、その研究には二つの軸がある。第一は、前 COE から継続する画像データベース構築(イコノテック)であり、そのための

ソフトを開発し、サーバー上に載せて限定された範囲で公開することを目指す。第二は、陰影研究(シャドウ・プロジェクト)である。これはイメージ上の陰影(Shade & Shadow)に関する研究であり、さらに二つの研究方向に分かれる。すなわち、一つ目は陰影の認識認知に関することであり、認知心理学の実験方法を導入し、画像処理を施した複数のイメージを被験者に呈示することでデータを集

める。二つ目はイメージ認識における歴史的文化的背景を明らかにすることである。歴史的に成立したイメージには、時間的かつ地域的に陰影について偏りがある(例えば、西洋近世は陰影について積極的である一方、日本では伝統的に陰影を施さなかった)。それらの時間的・地域的偏りが存在した理由を文化的地点に立って解釈する一方、現在もその偏りが存続するのか、一つ目の実験にフィードバックして検証する。

樽井は、倫理学者として、今回のプログラム全体に関して、研究が倫理的にも正しい仕方で行われるための実際的な教育および助言をするのみならず、生じうる理論的問題に取り組むことになる。他方、飯田は、概念分析に従事する哲学者として、研究のさまざまな局面で生じる概念的問題の解決という形で、今回のプログラムに何らかの貢献ができればと考えている。



論理学の観点から本 COE の研究テーマを探求していく。本論理学班は、一方で現代論理学の最先端の理論的研究を進めており、また他方で関連する学際分野における種々の論理研究を統合的に捉える研究を進めている。

このために、現代論理学、論理哲学、認知科学、脳科学を含めた様々な方法論により、論理推論および論理思考を多角的に解明する。情報科学的推論システムの研究を通じて、論理推論の情報科学的な解明を進める。また、これらの研究手法を通じて、論理的論証と直観との関連の解明などをはじめとして、論理と感性との関わりについて探究する。

本研究班プロジェクトは、線形論理や証明論等の最新の現代論理学的方法により、論理推論、論理的意味理解、論理的論証の成立条件、直観・感性との関係等についての根本的理解を深める

ことを目指す。特に、論理学の最新理論の構築と、脳科学・認知科学の情報科学の論理研究を統合した研究を進めていく。これらの統合的研究を通じて直観や知覚と論理との関係を明らかにすることを目指す。

空間表象・論理的理解や図形的推論や動物における論理的推論行動等の非標準的(非言語的)論理の側面も研究の視野に入れる。また、ロジックとレトリックの往復を含んだ文学的・芸術的表現の論理的分析を通じて、「論理と感性」についての新しい視点を捉えることも目指す。

現代の情報ネットワーク社会の基盤を成すコンピュータ概念は、20 世紀初頭に論理学分野でチューリングマシンとして誕生したことが知られているが、21 世紀の現代の論理学的観点が感性の情報科学的理解にどのように貢献し得るかを考察したい。また、近・現代の哲学史における「論理と感性」の主たる研究(例えば、カント、フッサール等)を現代論理学や現代の心の哲学的観点から見直す。

拠点運用委員会の紹介

国際教育研究プログラム

グローバル COE プログラムは、国際協力のまたとない機会を提供しています。このような機会を得て、既存の協力関係はさらに広がりを見せ、深められ、また新たなパートナーシップも築き上げられていくことでしょう。我々の GCOE プログラムは、さまざまな角度からの研究アプローチへ開かれています。それはメンバーが、個々の研究関心に従って研究を進めるプロジェクトにとって、最適な環境といえるでしょう。真に実りある活動にとって、最も信頼できる基盤となるのは、いつでも個人対個人の関係です。我々の活動が、そのような関係の元に、国際的に展開していくことを目指していきます。

(Wolfgang Ertl)

研究施設

研究施設委員会は教育研究のための設備を整えるための委員会です。さしあたっての委員会の仕事は2つあります。ひとつは東宝ビルのレイアウトの変更です。基本設計は8Fを共用の実験施設とし、6つの実験ブース内4つは防音実験室)とひとつのやや広い実験スペース(被験者待機室としても利用できます)を設置します。設備としては EEG、NIRS、TMS、アイマークレコーダがあります。7Fは研究員のディスクスペース(合計21)と事務スペースです。

この委員会のもうひとつの大きな仕事は磁気共鳴画像装置(ジューメンズ社トリオ)の導入で、これはそのための仮設実験室を綱町に建築します。実際に稼働できるのは年明けになるのではないかと思います。可能なかぎり急ぎます。MRIは本拠点の教育研究の中心設備ですので、多くの方にご利用いただきたいです。そのための訓練プログラムも充実させるつもりです。また、医学部生理学教室、理化学研究所の協力を得て、医学部リサーチパーク内にマーモセットの実験設備も作る予定です。

(渡辺 茂)

研究発信支援プログラム

グローバル COE では、教育・研究の成果を世界に向け発信することが求められている。このプログラムでは、特に若手の研究者、大学院生に焦点を当て、英文雑誌論文の執筆や国際学会での発表を支援する。前者に関しては、学術論文の書き方一般についての講演を企画し、執筆、英文校閲、投稿、修正要求への対応など、掲載受理までを、具体例をもとに実習する予定である。後者に関しては、少なくともこのプログラムの支援を受ける発表については、予行演習的な討議の場を設けたいと考えている。経費的には、英文校閲、論文掲載にかかる費用、国際学会の参加費用を援助・補助する予定である。

(小嶋祥三)

倫理委員会

被験者の協力を得て遂行される研究においては、まずもって協力者への倫理的配慮が求められるが、この配慮は通常二つの段階で行われる。第一は研究のプロトコルの作成と実施に際して研究者自身が行う自己検証、第二はこのプロトコルについて第三者が行う審査である。本委員会が担当するのはこの第一の側面であり、その最初の課題は、プロトコルの作成に先立ってセミナーを開催し、本研究を遂行する研究者が倫理的要件への理解を深めるのを支援することにある。なお、倫理的配慮の第二の側面は、既存の文学部研究倫理委員会に委ねられる。

(樽井正義)

広報委員会

広報委員会は、公開シンポジウム、講演会、進行中の研究などのホットな情報を提供すること、また研究成果を内外に向けて発信することを目的に活動します。ニュースレターを年4回発行し、各号で研究の最先端のトピックスを取り上げていきます。年度末には、1年間の研究成果をまとめた研究成果報告書を発行します。また、事業推進者の先生方の協力のもと、各研究テーマに関する英文の本の発行を促進し、研究成果を多方面にアピールしていきたいと考えています。

(山本淳一)

提携拠点からのメッセージ

ルドヴィッヒ・ヒューバー教授

ウイーン大学神経生物学・認知研究学部

このたび、グローバル COE「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」が採択され、開始されることを聞き、たいへんうれしく思います。これは、渡辺茂教授の先導と創造性に多くよっていることは間違いありません。私は、この数年間行ってきた、アイデア、学生、議論の交換を通じた、様々な異なったレベルでの実り多きコラボレーションのことを思い出することができます。このコラボレーションの最も新しい、目に見える成果は、(Springer社から出版されている)「動物認知(Animal Cognition)」誌での「動物の論理:ヒトの言語なしでの判断」というタイトルの特集号です。ヒトの心が、ヒト以外の動物の心と同じく、どのように働いているかに関する研究の到達点で、発見の数々を論述した論文集です。現在動物で研究されている現象に、概念化できる明確な哲学的基盤があるということは、(ヒト)の論理と言語の科学と関係づけることができるということです。推移的推論、因果律、心の読み取り、概念形成などは、伝統的に、心の論理と哲学の中で位置づけられている認知過程の概念です。このように、今回のグローバル COE では、これまで別々に希求されてきた心の理解を統合するステップであり、その意味で、傑出した並ぶもののない先導であります。

ハンス・ビショフ教授

ビーレフェルト大学(ドイツ)エソロジー学部

合理性と感情とは、人の心の中の2つの重要な次元であることは疑いありません。現代人の社会では、心の健康を損なうことが益々多くなっています。これは、これらの次元のバランスが失われ、それらを的確に用いる力が消えつつあるからです。それゆえ、人の心のこれら2つの側面の起源と相互関係を研究し、適切な使用や誤った使用がもたらす影響を究明するのは、今しかないのです。今、始まろうとしている「論理と感性の先端的教育研究拠点」は、これらの問題を、広い学際的なアプローチによって、深く探求していこうとするものです。それは、進化生物学から、認知機能の行動・神経生物学的探求を経て、哲学や文化人類学へと向かっています。このプロジェクトが学際的であるというのは、慶應義塾大学の異分野間のコラボレーションにとどまらず、日本国内、アメリカ、ヨーロッパの科学者たちも参加する国内および国際的な研究基盤をつくるからです。私は、渡辺教授をはじめとする研究者がこの素晴らしいプロジェクトを創造したことを祝福いたします。そして、ぞくぞくするような科学的成果を生み出し、若い科学者たちへの献身的な教育によって、日本だけでなく、人間社会の未来に向けて長きにわたって影響をもたらしてくれるものと確信しています。私も、この冒険の一員であり、その成功に貢献するよう力を尽くすつもりです。

活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	会議等の名称
7月20日	研究発信支援プログラム	大学院生のための英語によるプレゼンテーション演習
7月25日	哲学・文化人類学班	文化医療臨床人類学の新展開 精神医学の歴史研究：精神医療のローカルな実践と変容の医学誌史・社会的検討を通して
7月26日	国際教育研究プログラム	第108回バイオサイコシンポジウム
7月29日	哲学・文化人類学班	文化医療臨床人類学の新展開 人類の論理・感性 / 精神研究の融合領域におけるその位置：アラン・ヤング教授を迎えて「PTSD」、「論理と感性 / 社会的脳」、「先端医療と文化」を考える
8月1-2日	国際教育研究プログラム	Keio-Cambridge Joint Seminar
8月18日	脳と進化班	Avian Social Cognition: Do Birds Think about their Minds?
9月15-16日	関連学会（後援）	第4回子ども学会議（日本子ども学会 学術集会）「子ども・進化・脳科学」

哲学・文化人類学班 講演会 文化医療臨床人類学の新展開 - 精神医学の歴史研究(7月25日開催)

7月25日、<文化医療臨床人類学の新展開>シリーズの一環として、講師に鈴木晃仁慶應義塾大学経済学部教授(医学史研究)を迎え、Hysterics and Degenerates, Japanese Style: Doctors and Patients in a Private Psychiatric Hospital in Modernist Tokyoの演題にて講演会を開催した。演者は、精神医療のローカルな実践と変容の医学誌史・社会的検討を通しての精神医学史研究の例として、1920-30年代の日本の精神医療の一面と新興中流家庭での世代葛藤とが交差する様相について、王子脳病院の同時期のカルテ資料を用いた分析を示し、指定討論者 Allan Young 氏(McGill

University、慶應義塾大学社会学研究科特別招聘教授)を中心に、活発な議論が行われた。

普遍性志向のもとで日本で普及した西洋精神医学が、実際には、地域的文化社会的制度的要因との相互作用によって屈折変容したかたちで使用される様相が日本の事例を通して、あきらかにされたが、今後さらに展開されるべき細かい方法論的課題、西洋でも同じ問題が文脈によってみられる点などが討論され、論理 / 感性の文化的規定要因に関する研究枠組作成の際に示唆となる論点が示された。(宮坂敬造)

哲学・文化人類学班 シンポジウム 文化医療臨床人類学の新展開 アラン・ヤング教授を迎えて(7月29日開催)



7月29日(日)、10:00 ~ 18:00 東館 GSEC-LABOにおいて、<文化医療臨床人類学の新展開 人類の論理・感性 / 精神研究の融合領域におけるその位置 アラン・ヤング教授を迎えて「PTSD」、「社会的脳」、「先端医療と文化」を考える /

A New Horizon in Culture, Medical, and Clinical Anthropology Exploring New Research Areas of Human Logic, Sensibility, Reason and Emotion: PTSD, the Social Brain and New Medical Technologies Drawing upon Allan Young's Work in Medical Anthropology>を開催した。マッギル大学医療人類学教授アラン・ヤング先生は、2007年7月14日~8月9日の日程で、慶應義塾大学社会学研究科招聘教授として来日されたが、同大学院の教育プログラム強化のために、大学院講義をお願いするかわら、同上研究セミナー学会(グローバルCOE「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」および慶應義塾大学社会学研究科研究資金による)のための、基調講演オリジナル論文「Changing Perspectives on Mind, Brain, and Empathy: Implications for Understanding the Intersection of Reason and Emotion.」を用意して下さった。基調講演では、近年の社会脳研究

枠組みにふれ、その発展は機能性MRIによる脳機能画像解析技術の進展と密接に係るものの、19世紀後半の神経学者 Hughlings Jackson のモデルの再発見ともいえる点などが指摘され、心と脳モデルに関し理性と感情の交差点をどうとらえるかには歴史的枠組み変遷の検討がまず必要である点が指摘された。この研究セミナー学会は同教授に代表される文化医療人類学の広がりそのものをまず再把握し、その背後の共通潜在テーマを理解することが目標であったが、前半部のワークショップでは、「Putting Disease on the Body? Pharmaceutical Practices of Diabetes Care in Japan (Mohacci Gergely) 同コメント(浜雄亮) 日本の幹細胞研究と再生医療の現状(八代嘉美)、総合コメント(波平恵美子)、後半部の研究セミナーでは、ヤング教授の同上基調講演ほか、Trauma, Narrative, and 'Fonction Fabulatrice' of Janet(江口重幸)、The Pervasiveness of the Concept "Trauma" in Japan, 1980-2000(佐藤雅浩)、Social and Communication Development in Autism Spectrum Disorders(直井望)、Neuroethics in Contemporary Context of Scientific Communities in Japan(福士珠美) 全体討論(白波瀬丈一郎、波平恵美子、北中淳子、宮坂敬造)の順で慶大、東大、お茶の水女子大等の研究者が発表・討論をおこなった。参加者は90名程度だが、主要な若手や重鎮の研究者が参加し、活発な学会となった。終了後、社会学研究科委員長杉浦章介教授主催による懇親会が開催され、ヤング教授以下が拠点リーダー渡辺茂教授等と交流した。(宮坂敬造)

Keio-Cambridge Joint Seminar 報告(2007年8月12日 於: Cambridge 大学 Downing カレッジ)



去る8月12日に Cambridge 大学 Downing カレッジにて、Keio-Cambridge Joint Seminar が行われた。本拠点と同大学比較認知研究室から大学院生が各4名が参加し、日頃の研究成果についての発表と議論を行った。参加教員は、Trevor Robbins、

Anthony Dickinson、Nicky Clayton、Nathan Emery、伊澤栄一であった。各院生には、それぞれ約1時間の持ち時間が与えられた。とかくピアノの発表会になりがちな学会発表とは異なり、データ発表にとどまらず、関連研究

のレヴューと今後の展望まで含めた研究の位置づけを明瞭にメッセージとして構成し、関連研究の第一線で活躍する同大の教員陣の前に、発表することが要求された。院生達は、その準備に相当な労力を要したが、それが十分に伝わり、ケンブリッジ側の院生、教員から、率直なコメントが院生たちに直接投げかけられた。休憩時間には、次第に院生達も半ば開き直ったのか(!)、質問や実験そのものの相談など積極的なコミュニケーションを図る姿勢が大変印象的であった。2日目午後に行われたラウンドテーブルでは、与えられたテーマと各自の研究をいかに結びつけて発言するかという点で、まだまだ力不足は垣間見えたものの、それらも含め、大変有意義な2日間であった。

(伊澤栄一)

特別研究教員紹介



石井 拓

主にオペラント条件づけの技法を用いた動物行動研究に携わってきました。取り上げてきたテーマは選択行動、インターバル計時、行動の変化抵抗などです。また、結果が不確実な場面でのヒトの選択行動も取り上げてきました。グローバル COE では衝動的行動と自己コントロールの対立を手がかりとして、論理と感性の問題に実験的にアプローチします。また、内面的な問題として捉えられがちな論理と感性を行動分析学の立場からはどのように分析できるかについても興味を持っています。



辻井 岳雄

脳と進化班の特別研究教員になりました辻井岳雄です。専門は認知神経科学で、主に脳磁図(MEG)、近赤外分光法(NIRS)、脳波(EEG)を用いて、作動記憶、社会的認知、感性処理、論理推論の研究を行っています。また、記憶認知に及ぼす抗ヒスタミン効果の実験では、認知神経科学を臨床薬理に應用することで積極的な産学連携を進めてきました。現在は、経頭蓋磁気刺激用のナビゲーションシステム(ルージュリサーチ、Brainsight)と機能的MRI(シーメンス3.0T、Trio-Tim)の導入の仕事に携わっています。今後ともお世話になりますが、何卒よろしく申し上げます。



小川 芳範

本センター特別研究教員の小川です。分析哲学、哲学および論理学史を専攻しています。本センターにおいては、論理的推論および論理の基礎について、岡田光弘先生および論理・情報班の皆さんとの緊密な共同作業をつうじて、哲学・思想史的観点から研究を進めると同時に、「人間」についての哲学、すなわち哲学的人間学という観点から、論理と感性の問題について包括的にアプローチしていきたいと考えています。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



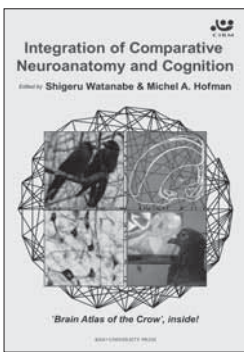
星 聖子

哲学・文化人類学班の特別研究教員になりました星 聖子です。専門はイタリア美術史で、特にルネサンス期にヴェネツィアで制作された祭壇画に関心があります。また先の COE プログラムに引き続き、美的体験と心の問題に関心を寄せています。「美」とは生得的に判断されるもののでしょうか？ 社会的文化的背景はその判断にどのような影響を与えているのでしょうか？ 論理と感性がせめぎあう場としての美術作品について、さまざまな角度から取り組んでいきたいと思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

事務局だより

関連書籍の紹介

“Integration of Comparative Neuroanatomy and Cognition”



拠点リーダー渡辺茂(本学文学部教授)と Michel A. Hofman (Netherlands Institute for Neuroscience Amsterdam) の共同編集による、比較認知と比較脳解剖学の融合を目指した論文集を刊行しました。これは、2006年8月に本学三田キャンパスで開かれた同名の国際会議を元にしており、脳の進化研究の草分けである H.J. Jerison を始め、M.A. Hofman や A.C. Kamil など、各分野の第一線級の研究者による執筆です。また、近年その高い知性が注目されている、カラスの「脳地図」が本書において世界で初めて報告されました。 ISBN 978-4-7664-1394-6

編集後記

グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」がスタートして半年、ニュースレター1号をお届けいたします。我々人間の活動は、天秤の両側にのった論理と感性のバランスを調整することによって、さまざまな方向へと展開していくのでしょうか。本拠点では、今後、fMRI など研究設備も充実していく中で、この問題に多角的に取り組んでいきます。私どもの今後の活動に、ご注目いただければ幸いです。

最後になりましたが、本号の編集にご協力いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。(星 聖子)

活動予定

Symposium on Perception of Biological Motion
日時：10月17日(水)13:30-18:00
会場：三田キャンパス東館 G-SEC Lab
講演者：Nikolaus Troje (Queen's University)
山口真美(中央大学文学部)
平井真洋(自然科学研究機構 生理学研究所)

Keio-Vienna Joint Seminar: Experimental Studies of Social Cognition in Birds
日時：10月23-25日
場所：ウィーン大学神経生物学・認知科学教室

言語と認知班「意味論研究会」

9月7日(会場：慶應義塾大学・三田)
講演者：古賀弘毅(佐賀大学)
10月26日(会場：弘前学院大学)
講演者：David Yoshikazu Oshima(茨城大学)
11月30日(会場：慶應義塾大学・三田)
講演者：Anastasia Giannakidou(シカゴ大学)
詳しくは下記事務局までお問い合わせ下さい。

慶應義塾大学 論理と感性の先端的教育研究拠点
Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility
Newsletter 2007. September. No.1

発行日 2007年9月28日
代表者 渡辺茂
〒108-0073 東京都港区三田3-1-7 三田東宝ビル7F・8F
TEL: 03-5427-1156
FAX: 03-5427-1209
coe-office-al@flet.keio.ac.jp